

## 第5群

## 1~22 看護学生の自尊感情と学習環境の受容にかかわる因子の学年別、時期別変化

聖母女子短期大学 ○筒井真優美・和田サヨ子・沢 禮子  
聖路加看護大学 高木廣文

## 1. はじめに

多くの看護学生は青年期にあり、種々の緊張に耐えるほどに成熟していないにもかかわらず、対象である人間の生、病、死、苦しみなど各種の経験をしている。また、これらの経験を通して、アイデンティティの確立、看護への認識を深めていくと考えられる。学生は臨床実習、友人や教師との人間関係、本学教育理念の理解へのアプローチ（日常生活における聖書的アプローチ<sup>注</sup>）などの学習環境をどう受けとめているのだろうか。C. Rogers<sup>1)</sup> は、環境の受容には自己概念が重要な役割をもつと述べている。自己概念の重要な部分を占める自尊感情 (self-esteem) が肯定的な人、すなわち自分を価値あるものととらえ、他人から尊敬されていると感じている人は、環境を受容し、環境に積極的に適応していくと考えられる。

看護学生を対象とする研究には、学習意欲、学生生活への適応、臨床実習の受容、看護職の認識などに関するものがあるが、学生自身の内面と学習環境に焦点をあてた研究は少ない。

本研究では、看護学生が学習環境を受容するための効果的アプローチに役だてるために、1. 看護学生の自尊感情と、学習環境（教師や友人との人間関係、看護への適応、日常生活における聖書的アプローチに対する反応）の受容に関する因子、2. 学年別、時期別の変化を検討することを目的とした。

## 2. 対象と方法

本学の全寮制による3年制看護短大生1年43名、2年38名、3年37名、計118名を対象とし、1985年7月、1986年3月の2回にわたり、質問紙による調査を行った。なお回収率は100%であった。

質問紙は46項目からなり、自尊感情の測定は、信頼性の検討がなされている遠藤ら<sup>2)</sup>の自尊感情尺度項目を使用し、学習環境としては、教師や友人との人間関係、看護への適応、さらに、日常生活における聖書的アプロ

表1 学年間で有意差が認められた項目（7月）

| 項目               | (* P<0.05)<br>(** P<0.01) | はいと答えた人数の% |      |      |
|------------------|---------------------------|------------|------|------|
|                  |                           | 1年         | 2年   | 3年   |
| 看護への適応           | 看護職は自分をいかす*               | 73.8       | 47.4 | 45.7 |
|                  | 実習が好き*                    | 66.7       | 47.4 | 31.4 |
|                  | 自己学習は適量**                 | 26.2       | 13.2 | 0    |
| 聖書に<br>対する<br>反応 | 聖書は感謝の念を増させる**            | 69.0       | 78.9 | 40.0 |
|                  | 朝の祈りは力を与える*               | 47.6       | 52.6 | 22.9 |
|                  | 夕の祈りは感謝を与える**             | 58.5       | 60.5 | 28.6 |
|                  | 朝礼により自己肯定*                | 35.7       | 47.4 | 17.1 |
| 教師との関係           | 先生とのコミュニケーションに満足**        | 31.0       | 18.4 | 0    |
|                  | 学校で相談できる先生がいる*            | 35.7       | 42.1 | 22.9 |

チに対する反応に関する項目を設定した。

分析は、調査時期と学年により、各項目間のクロス集計を行った。次に因子分析（バリマックス法）を行い、さらに抽出した因子の因子得点を求め、各学年間での差を調べるために分散分析を行った。

## 3. 結果

(1) 調査時期別、学年別による各項目間のクロス集計

各項目を、学年および調査時期別にクロス集計し、有意差のみられた項目で「はい」と答えた%を表1、表2に示した。

1) 7月のデータ（表1）：看護への適応に関しては、1年が高く、3年が低くなっている。聖書的アプローチに対する反応は、2年で肯定的な割合が高く、3年が低くなっている。教師との関係は、3年が低くなっている。

2) 3月のデータ（表2）：看護への適応に関しては、1年が高く、2年が低くなっている。2年は7月より低くなっている。聖書的アプローチに対する反応は、

表2 学年間で有意差が認められた項目(3月)

| 項目 $\left( \begin{array}{l} * P<0.05 \\ ** P<0.01 \end{array} \right)$ |                     | はいと答えた人数の% |      |      |
|------------------------------------------------------------------------|---------------------|------------|------|------|
|                                                                        |                     | 1年         | 2年   | 3年   |
| 看護への適応                                                                 | 看護職は自分をいかす*         | 79.1       | 47.1 | 59.5 |
|                                                                        | 実習が好き*              | 69.8       | 31.4 | 51.4 |
|                                                                        | 看護職に誇り*             | 93.0       | 66.7 | 78.4 |
| 聖書的アプローチに対する反応                                                         | 聖書は感謝の念を増させる*       | 90.7       | 63.9 | 59.5 |
|                                                                        | 聖書は看護職への誇りを増加*      | 74.4       | 44.4 | 45.9 |
|                                                                        | 聖書は看護職を「天職への召命」とする* | 68.8       | 38.9 | 40.5 |
|                                                                        | 聖書は臨床での判断の指針*       | 37.2       | 31.4 | 21.6 |
|                                                                        | 聖書による葛藤**           | 44.2       | 22.2 | 8.1  |
| 自尊感情                                                                   | いつかは尊敬される**         | 20.9       | 2.9  | 0    |
|                                                                        | 自分の能力への自信**         | 14.0       | 0    | 13.5 |
|                                                                        | うまくやれることはない*        | 20.9       | 22.2 | 16.7 |

1年で肯定的な割合が高い。自尊感情は、1年が高い。

#### (2) バリマックス法による因子分析

バリマックス法による因子分析の結果、7月、3月のデータで各々7つの因子が抽出された。第1因子は、「聖書は感謝の念を増させる」「聖書は看護職に対する誇りを増させる」など、『聖書的アプローチに対する肯定的反応』に関する因子と考えられる。第2因子は、「人の思いが気になる」「人が自分を好んでいるか気になる」など、『他人の目が気になる』に関する因子と考えられる。第3因子は、「実習が好き」「看護職に誇り」など、『看護への適応』に関する因子と考えられる。第4因子は、「人との話題に困る」「初対面の人との話がむずかしい」など、『対人関係のむずかしさ』に関する因子と考えられる。第5因子は、「聖書と自己の不一致による葛藤」「聖書によって人間関係が気になる」など、『聖書による葛藤』に関する因子と考えられる。第6因子は、「価値あるものは何かと疑う」「自分の能力への自信」など、『自信がない』に関する因子と考えられる。第7因子は、「先生とのコミュニケーションに満足」「先生とのコミュニケーションがある」など、『教師とのコミュニケーション』に関する因子と考えられる。

これら7つの因子の累積寄与率は、48% (7月のデータ)、45.9% (3月のデータ) であり、7つの因子により説明できない46項目のばらつきは、まだ50%以上ある。

#### (3) 因子得点の学年別、調査時期別の分散分析

各学年、また同学年による7月と3月の各因子の差を調べるために、因子得点を求め、分散分析を行い、各学年ごと、調査時期による因子得点の平均値を図1に示した。3月のデータは、寄与率の高い順ではなく、7月の結果と符合するようにその順序を一部並びかえた。有意差の認められた因子は下記の通りである。第1因子『聖書的アプローチに対する肯定的反応』において、各学年間に7月、3月ともに有意差が認められた。7月の平均値は2年が最高であり、3年が低下している。3月の平均値は1年が最高であり、2年が低下している。

第3因子『看護への適応』において、7月の各学年間に有意差が認められた。平均値は1年が最高であり、2年が最低である。有意差は認められなかったが、3月の調査時期では、2年がさらに低下している。

第7因子『教師とのコミュニケーション』において、7月の各学年間に有意差が認められた。平均値は1年が最高であり、3年が最低である。3月の調査時期では、3学年の差が小さくなる傾向を示していた。

有意差は認められなかったが、2年は7月から3月にかけて、他人の目が気になり、自信がなくなるなど、自尊感情が低下している傾向がみられる。また、2年は7月から3月にかけて看護への適応、聖書的アプローチに対する肯定的反応が低下しており、教師とのコミュニケーションも多い方ではない。

#### 4. 考 察

聖書的アプローチに対する反応：7月は2年が肯定的反応を示し、3月は1年が肯定的な反応を示し、2年が低下している。教育理念の理解へのアプローチは、1年にとってアイデンティティの確立、看護観、さらに自分の歩むべき目標を明確化していくために重要ではないかと考えられる。2年後期から3年になると、教育理念は各々の中に定着し、むしろアプローチそのものより、それを看護実践の中でどういかしていくかが各々の課題になっていくものとも思われる。

看護への適応：7月、3月ともに、1年の適応が高く、2年は7月の平均値が学年の中で最低であり、3月はさらに低下している。有意差は認められなかったが、2年は7月、3月に自尊感情が低下し、看護への適応、聖書的アプローチに対する肯定的反応が低下しており、教師とのコミュニケーションも多い方ではない。2年、3年になると臨床実習が増加し、対象である人間の生死、苦痛などに会える機会が多くなり、看護の厳しさを知るとともに、2年は、知識・技術・態度のいずれにおいても未熟な自分を発見し、苦しむ時期と考えられる。

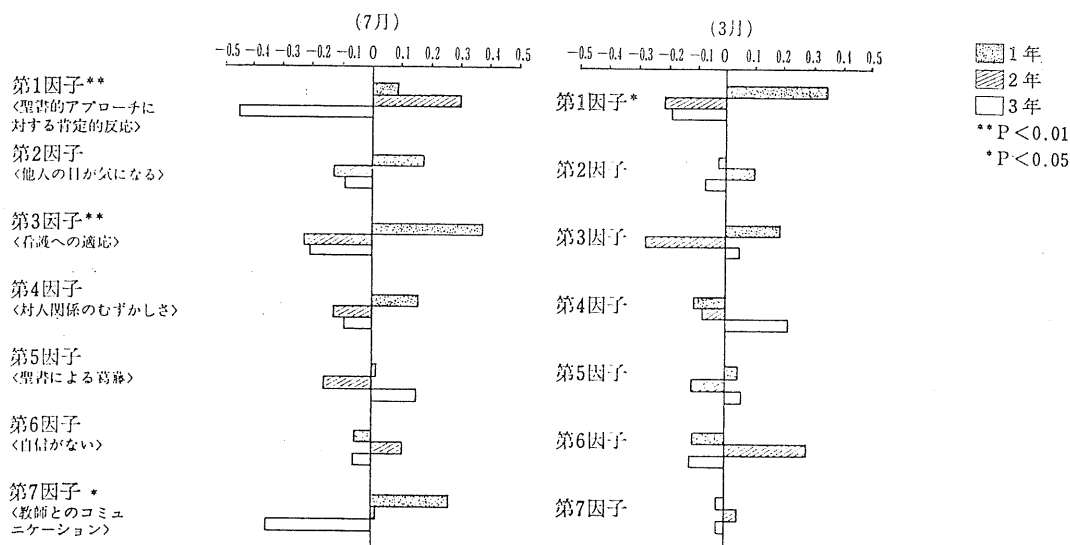


図1 7月、3月の学年ごとの各因子得点の平均値

これは他の3年制看護短大、3年制看護学校の研究結果<sup>3)4)</sup>とも一致し、2年の学生に対しては、指導のあり方、教師のサポートなどが重要になるであろう。今後の研究課題である。

教師との人間関係：7月は1年が教師とのコミュニケーションがあるのに対し、3年は減少している。3月になると、3学年の差が小さくなる傾向がみられた。教師との人間関係は、学生が実習をむずかしく感じることに関与する因子とも考えられ、教師の決めつけ、待つことができない性急さ、魅力のなさ、また学生にとって援助者としてより、評価者として感じられる教師のありようそのものも考えなければならない<sup>5)6)</sup>。実習の中での教師のかかわり方も今後の課題である。

自尊感情：有意差はないが、2年は7月から3月にかけて、他人の目が気になり、自信がなくなるなど自尊感情が低下する傾向がみられる。これは前述したように、2年に実習が多くなり知識・技術・態度が未熟な自分を発見するとともに、青年期の特徴とも関係していると思われる。2年の自尊感情が低下していく時期に、希望を持たせながらいかにサポートしていくかが課題と考えられる。自尊感情は、学習環境の受容に関係するとともに、学習環境が学生の自尊感情にも関係していると思われる。

## 5. 結 論

(1) 看護学生の自尊感情と、学習環境の受容に関する因子：7つの因子が抽出された。

(2) 学年別・時期別の変化：7月に有意差が認めら

れたのは、『聖書的アプローチに対する肯定的反応』『看護への適応』『教師とのコミュニケーション』であった。3月に有意差が認められたのは、『聖書的アプローチに対する肯定的反応』であった。2年は『看護への適応』が低く、この時期のとり組みが課題である。

現在本学では、この結果をもとに2年に対して意図的な教育的かかわりを行っているが、次回にはこのとり組みの評価を含めて、縦断的研究の結果を発表させていただきたいと思っている。

注) 本学の教育理念の理解へのアプローチ：聖母子短期大学では、キリストの教え、すなわち聖書を通じて学ぶ人生観を土台として、看護教育を行っている。具体的には、学校生活・寮生活を通しての朝夕の祈りと、カリキュラム上でのキリスト教概論、人間論、聖書研究、黙想会による体験学習その他の行事によるアプローチである。

## 引用文献

- 1) Rogers, Carl R. 村山正治編訳：ロージャーズ全集12, 人間論, 初版, 26, 96, 岩崎学術出版社, 1968.
- 2) 中西信男・他編：心理学10, 自我—自己, 初版, 197~210, 有斐閣双書, 1981.
- 3) 山本よしゑ・他：看護学生の看護職へのアイデンティティの形成過程, 第16回看護教育, 140~142, 1982.
- 4) 玉木ミヨ子・他：臨床実習場面における態度育成の教育方法, 看護展望, 11(6), 633~637, 1986.
- 5) 鈴木正子・他：内科看護を“難しい”と感じた学生の実習中における患者・看護婦・教員との関係, ナースステーション, 16(1), 90~95, 1986.
- 6) 伊藤暁子・他：看護学生の生活と看護教育に対する考え方, 看護実践の科学, 10(3), 18~42, 1985.